



Title	直観と道徳的判断に対するピーター・シンガーの立場とその補完 : 道徳的正当化を中心に [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	金, 雲龍
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16482号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/94854">https://hdl.handle.net/2115/94854</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	doctoral thesis
File Information	Woonyong_Kim_review.pdf, 審査の要旨



# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：金 雲龍

主査 教授 藏田伸雄  
審査委員 副査 教授 村松正隆  
副査 教授 大沼 進  
副査 准教授 森元良太(北海道医療大学)

## 学位論文題名

直観と道徳的判断に対するピーター・シンガーの立場とその補完：

道徳的正当化を中心に

### ・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は現代の代表的な倫理学者である、P. シンガーの著書*The Expanding Circle*や、彼の近年の効果的利他主義に関する文献を用いて、シンガーの功利主義理論における理性や感情、さらに直観について批判的に検討したものである。本論文はシンガーの道徳的正当化の方法について批判的に扱っているが、その主な目的はシンガー批判よりもシンガーの立場の補完にある。

本論文の意図は、直観と道徳的判断についてシンガーが進化心理学や現代の心理学との関連で論じたものについて、それが自然主義的誤謬に陥っていないかを検討することである。シンガーは進化生物学に基づいて自分の理論を擁護しているが、シンガーの主張の中で重要な概念として扱われているのは、互惠性、不偏性、理性である。シンガーは、我々は互惠性によって不偏性という概念を造り出し、不偏性を理性に発展させ、倫理体系に至ったと説明している。またシンガーは理性だけでなく、進化生物学的観点から共感と感情に訴える方法も試している。結論として、金氏はシンガーの理論の中で感情と直観は規範的に扱われており、それを認めることによって、シンガーの道徳的正当化の方法は一貫したものになると主張する。シンガーは理性という概念によって、自然主義的誤謬を克服しようとしたが、シンガーは道徳判断が本能的な互惠性の感覚にもとづいていると考えている点では自然主義者であり、そのためシンガーは自然主義的誤謬を完全に克服できていないと金氏は主張している。

また金氏は、互惠性を計算された互惠性と感情的(態度的)互惠性に区別するトマセロとドゥ・ヴァールの研究を提示し、計算された互惠性だけでなく、感情的(態度的)互惠性にも基づくべきだと主張している。

また本論文ではシンガーが訴える博愛(benevolence)の原理が、道徳的判断が正当化されるための基準となるとされている。シンガーによれば、倫理的観点は全体の善を増進することを要求する博愛の原理によって正当化され、道徳判断は上位の原理である博愛の原理に照らして正当か否かを問われなければならない。何らかの感情が全体の善を増進するのであれば、それは博愛の原理によって規範的に正当化されると考えることができる。

さらに本論文では、シンガーが非認知主義から認知主義へと立場を転換したにもかかわらず、その道徳的正当化の方法にある程度一貫性があることが確認されている。

また金氏はシンガーによって提起され、近年マカスキルらによって進められている社会運動である「効果的利他主義」は規範的なものかどうかについて、マカスキルとシンガーを比較した上で、それは規範的なものであるとする。そして金氏は、シンガーは効果的利他主義においても感情と直観を規範的なものとしているとする。

## ・学位授与に関する委員会の所見

本論文では、従来あまり顧みられることのなかったシンガーの進化倫理学的研究を批判的に検討し、さらに近年の効果的利他主義に関する主張も検討することで、シンガーが理性や感情、さらに互惠性や不偏性についてどのように理解していたのかが明らかにされている。また本論文ではシンガーを中心とすることによって、ウィルソン、グリーン、ハイト、トリヴァース、ドゥ・ヴァール、トマセロといった論者による、進化生物学や心理学の分野における人間の道徳性に関する研究の成果が整理されている。

ただし金氏は事実と価値のギャップがあるため、進化生物学を倫理学に適用することには限界があるとするが、そうであればシンガーが進化生物学の研究成果を自らの倫理学理論を補強するために用いているという事実を、どのように評価すればよいのかという疑問が審査委員から出された。また進化生物学等から得られる科学的事実をどの程度まで人間の道徳性の間接的な証拠として使用できるのか、という点についての考察が不十分ではないか、といった疑問も出された。また理性の機能を進化生物学では説明できないとする主張についても疑義が呈された。さらに本論文で鍵となる自然主義的誤謬の概念についてもやや図式的なのではないかという点が指摘された。特に金氏がシンガーに対して批判的な立場であるにも拘わらず、シンガーの倫理学的立場を支持する理由が十分に述べられていないという点も指摘された。口頭試問の際にはこういった問題点について必ずしも十分な回答は得られなかったが、金氏自身もこれらの問題点を十分認識していることが確認された。

本論文はシンガー研究にとって重要な貢献であり、また科学と規範倫理学との関連について議論を喚起するものである。こういった点は高く評価されるものであり、本論文は博士(文学)の学位を授与するに値すると審査委員会は全員一致で判断した。